いま私たちが住んでいるこの街（地域社会）が50年後においても存在し繁栄している状態（持続可能な地域社会）にするためのパラダイムシフトとは何か。

あなた自身や今あなたが住んでいる街が元気になるヒントを見つけてください。

一言市栄

地域政党日本新生代表
前阿賀野市長　天野 市栄

はじめに

この小冊子「一言市栄」は、私が阿賀野市政を担当した４年間（平成20年４月から平成24年４月）、市の広報誌に掲載された市長エッセー「一言市栄」をもとに若干の加筆、修正を加え編集したものです。

私が４年間の市政を担当するにあたり、最初にイメージしたふるさと（わが街）の姿は次のようなものでした。

少年の頃に見えた感じたふるさとの情景を時々思い出します。家の前に広がる田園風景、点在する農村集落、遠くに見える五頭の山並み。春の緑色、夏の青色、秋の黄金色、冬の白と黒。青葉の匂い、くさいきれ、稲わらの匂い、鼻を刺す冷たい空気の匂い。春はたんぼを耕す耕運機の音、夏は蝉の声、秋は鎌で稲穂を刈り取る音、冬は北風の音。ふるさとには四季折々の色と匂いと音があります。

当時の農作業はほとんどが手作業で行われ、特に田植えや稲刈りは、家族や親戚、近所の人の手を借りて行っていました。稲刈りでは、刈り取った稲を乾燥させるため、稲架木（はさぎ）と呼ばれる、木と竹を組み合わせて格子状になったところに掛けていきます。秋の日を浴びて、まるで黄金色の屏風のようです。

ふるさとの美しい自然環境や風景を大切にしながら、そこで営まれる固有の生活様式（地域文化）を振興し、将来に向って持続可能な地域社会に発展させたいと考えています。

そのためにも、阿賀野市を「住んで良かった。住んでみたい。帰りたい。」と思える魅力ある地域にしたいと考えています。

私が少年期（小中学生の頃）を過ごした頃の日本経済は、高度経済成長期（1955年～1973年）に入っていました。経済成長率も平均で9.1%と現在の中国と同じくらいに経済が拡大していた時期でした。日本の人口構成がボーナス期（生産年齢人口の増加）にあって、地方の若者が豊富な労働力となって大都市へと流れていきました。また、地方においても製造業を中心とした工場の立地が始まり、私の父も農業のかたわら近くに進出してきた上場企業の製造工場で働いていました。子供ながらも「昨日よりも今日、今日よりも明日」と日々生活が豊かになっていくのを実感できた時期でした。

しかし、高度成長期から半世紀を経た今はどうでしょうか。1990年代初頭のバブル経済終結後の約20年間は「失われた20年」と呼ばれ、この間の実質経済成長率は平均0.7%

と日本経済は低成長期に入り、長引くデフレ経済の中にありました。最近はデフレ経済を脱したかのような見方も出ていますが、まだそのような実感は持てません。人口構成も1990年頃からオーナス期（生産年齢人口の減少）に入り、日本の総人口も2008年頃から減少し始め、本格的な「人口減少社会」に入りました。特に、少子高齢化を伴った「人口減少社会」は先進国では日本だけです。日本はどのようにしてこの「人口減少社会」と向き合っていったらよいのでしょうか。手本となる先進国はありません。

話を変えて私が現在、住んでいる街の状況をお話します。私は市街地にある中古住宅（借家）に住んでいます。この家に妻と子（娘）の3人で暮らしています。この借家が建てられた昭和44年は私が小学生の頃です。まだ十分使える家ですが二世代で空き家になってしまったのです。毎晩、夜になっても明かりが点灯していない家は空き家です。私が住んでいる近所にこのような空き家が増えています。

日中、通りを歩いている人はお年寄りばかりです。朝晩の散歩も犬を連れた高齢者が多いようです。学校の登下校時に数名の小学生や中学生の姿を見る以外に、普段、子供の姿を目にすることは少なくなりました。最近は子供の笑い声や泣き声も聞こえません。これが今、私が住んでいる街の現状です。同じような状況になっている街が多いのではないかと考えています。「限界集落」という言葉があります。これは過疎などにより65歳以上の高齢者の割合が50%を超えた集落を指して、こう呼んでいますが、集落だけではなく市街地でも「限界町内会」が増えているように感じます。

このように半世紀（50年）という時間の経過が私たちの生活環境に大きな変化をもたらしたように、これから半世紀後（50年後）の日本や地域社会は更に大きな変ぼうを遂げていることでしょう。しかし、大事なことは今私たちが住んでいるこの街（地域社会）が半世紀後（50年後）においても存在し繁栄していることです。私が阿賀野市の市政を担当するにあたり目指した「将来に向って持続可能な地域社会」とは、このような状態を指しています。

「持続可能性」（サステイナビリティー）という言葉は、一般的には人間が行う生活、消費、生産など社会経済活動全般を指して使われています。最近では、特に環境問題やエネルギー問題を考える際にこの言葉が使用されることが多いようです。「持続可能な開発」とは、現代の世代が将来の世代の利益や要求を充足する能力を損なわない範囲内で環境を利用し、要求を満たしていこうとする理念として理解されています。（出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

私が考える「地域社会（私たちが住む街）の持続可能性」とは、私たちがいま住んでいるこの街が将来においてもこの場所に存在し、社会経済活動全般が活発に行われ繁栄している状態です。そのような状態を望むなら、今この街に住んでいる私たちが自らの意識・考え方を時代（環境）の変化（潮流）に合わせて変えていく（パラダイムシフト）必要があります。自然界の動植物を見ればこのことがよく分かります。人間の諸活動によって制約を受けた環境の中で厳しい生存競争が行われています。環境の変化に合わせて自らの体を順応できるよう改造した種だけが生き残ることができるのです。適者生存、優勝劣敗、弱肉強食。これが自然界の摂理（掟）なのです。

もちろん人間社会は自然界とは異なり、環境の変化に合わせて体まで変化させる必要はありませんが、意識・考え方は変えていかなければ、いま私たちが住んでいるこの街（地域社会）を持続可能なものにすることはできません。地域社会を持続可能なものにするためのパラダイムシフト（思考の枠組みの変化）の前提条件として私が考えていることは次のとおりです。

「依存から自立へ」～「なんとかしてくれ」から「なんとかしよう」へ
「他律から自律へ」～「どうしたらいいの」から「こうすればいいんだ」へ
「現状維持から変革へ」～「今のままでいいよ」から「これじゃだめだ」へ

もっと分かり易く言えば、「自分の目で見て自分の耳で聞く。そして自分の頭で考えて判断し行動する。行動の結果に対しては自分で責任を負う（自律・自立）。行動すれば現状が変わる（変革）。」ということです。当たり前のことのように思うかもしれませんが、実際はこのとおりにはやっていないのです。このような政治信念をもって私は４年間、阿賀野市政を担当しました。

最後に、この「一言市栄」を読んで、あなた自身や今あなたが住んでいる街が元気になるヒントを見つけていただくことを期待しています。

目　次

第１章　自分を知る　自分を磨く　人を育てる

吾唯知足（われ、ただ足るを知る）…… 6
ノブレス・オブリージュ（貴族の義務）…… 7
常日頃、ご自愛ください …… 8
衣食足りて礼節を知る …… 9
為せば成る …… 10
人生の大病は傲 …… 11
よい競争、わるい競争 …… 12
虎穴に入ずんば虎子を得ず …… 13
井戸の中の蛙 …… 14
青は藍より出でて藍よりも青し …… 15

第２章　他者との関わり方

和して同ぜず …… 16
君子の交わり淡きこと水のごとし …… 17
情けは人の為ならず …… 18
利己と利他 …… 19

第３章　個の確立

新たな責任の時代 …… 20
シンクグローバリー、アクトローカリー …… 21
虫の目、鳥の目、魚の目 …… 22
独立宣言 …… 23
見るべし、聞くべし、言うべし …… 24

第４章　街づくりの新しい視点

ハードよりもソフト、ソフトよりもハートが大事…… 25
地方自治と住民自治 …… 26
自助、共助、公助 …… 27

新しい公共 …… 28
経済と（エコノミー）と環境（エコロジー） …… 29
天地人 …… 30
地産地消のすすめ（食料編） …… 31
地産地消のすすめ（エネルギー編） …… 32

第５章　お金の入口と出口を考える

入るを量って出ずるを制する …… 33
よい借金、わるい借金 …… 34
負担と給付 …… 35
羊頭を懸けて狗肉を売る …… 36
所得再分配 …… 37

第６章　公益と私益

ニーズ（必要）とウォント（欲望） …… 38
全体の奉仕者 …… 39
官と民、公と私 …… 40

第７章　政治とは

情報公開と市民参加 …… 41
サイレント・マジョリティー（物言わぬ多数派） …… 42
可視化 …… 43
マニフェスト（政権公約） …… 44
情報公開と説明責任 …… 45
政治屋（ポリティシャン）と政治家（ステーツマン） …… 46
代議制民主主義と世代間格差 …… 47

吾唯知足（われ、ただ足るを知る）

この言葉は、枯山水の方丈石庭で有名な京都の龍安寺にあるつくばい（手水鉢）に刻まれた４つの漢字です。茶室蔵六庵の露地にあるつくばいには「吾唯知足」（われ、ただ足るを知る）の４字が刻まれています。水を溜めておくための中央の四角い穴が「吾唯知足」の４つの漢字の「へん」や「つくり」の「口」として共有されています。解説には「足りを知る者は貧しいといえども心は富んでいる、足るを知らぬは富めりといえども心は貧しい」とあり、人間の欲望には際限がなく、どこかで満足することを知らなければ幸せになれないことを説いています。

今ではどこの家でも当たり前のようにある洗濯機、冷蔵庫、テレビ、電子レンジ、パソコンなどの電化製品は一昔前にはありませんでした。洗濯機、冷蔵庫、白黒テレビが「三種の神器」として世の中に登場したのは半世紀ほど前です。その後、カラーテレビ、クーラー、自動車が「新・三種の神器」として普及し始めました。平成に入ると、デジタルカメラ、ＤＶＤレコーダー、薄型テレビが「平成の三種の神器」として登場しました。今後も、新製品の登場や高機能化が進み私たちの生活は一層快適なものになることでしょう。

また、携帯電話においては電話会社が高機能な新機種を次々と発売し、新規契約者に対してただ同然の価格で提供することにより、顧客獲得につなげようとしています。このため多くの人は、まだ使える電話機を廃棄してまで新機種を求めようとします。

物が豊富にある現代社会。お金さえあれば私たちの欲望を満たしてくれます。物が豊かになった反面、心が貧しくなっている気がします。学校や会社でのいじめ、毎年３万人を超える自殺者、通り魔事件に象徴されるように理不尽な殺傷事件などを見聞きすると悲しくなります。物があるかぎり物に対する私たちの欲望は尽きることはありませんが、時には物への執着心を自制し心の豊かさを求める余裕を持ちたいと考えています。
(平成20年９月号)

ノブレス・オブリージュ（貴族の義務）

高い地位や身分に伴う義務という意味で、身分の高い者にはそれに応じた社会的責任と義務があるとする考え方です。この言葉は欧米社会における基本的な道徳観を表わしたものですが、日本の武家社会においてもサムライの行動規範となった「武士道」に同様の考え方があります。

新渡戸稲造の著書「武士道」には、サムライの規範の中で最高の徳行として「義」（正義）を挙げています。武士にとって裏取引や不正な行為ほどいまわしいものはありません。また、「勇」（勇気）は「義」のために発動しなければ徳行としての価値はないとし、「勇」とは正しいことを行うことだと説明しています。「仁」（仁愛）は、愛、寛容、他者への愛情、憐みの情で、常に至高の徳として認められてきました。

さて、今年のＮＨＫ大河ドラマ「天地人」の主人公直江兼続は、武士道の根本精神である「義」と「愛」を体現した武将として描かれています。すなわち、戦国乱世に多くの人々が「利」（私利私欲）を求めて動いた中で、生涯にわたって「義」を貫き、「愛」の心をもって国を治めた為政者として描かれています。

毎回、高視聴率を維持しているのはなぜでしょうか。ひたす「利」を追い求め競争を繰り返す現代社会の構図が、直江兼続の生きた戦国時代と重なって見えるのではないかと考えています。

政府高官のゴルフ接待による汚職事件、教員採用試験をめぐる汚職事件、汚染米と知りながら主食米として流通させた大手の米販売業者、食品の虚偽表示が発覚して廃業した老舗料亭など、社会的に高い地位にある者が、不正な手段を使って「利」を求める姿があちらこちらで見受けられます。不正行為の代償はあまりにも大きく、「信頼」・「信用」という大きな財産を一瞬のうちに失ってしまいました。ノブレス・オブリージュを怠った悲しい現実です。市民の幸せを願い引き続き公平公正な任にあたってまいります。（平成21年２月号）

常日頃、ご自愛ください

最近、職場や学校で過度のストレスを受け、長期間にわたり休む人が増えています。文部科学省の発表によれば、平成19年度の公立学校教員の病気休職者数は8,069人で、このうち、うつ病などの精神疾患による休職者は4,995人で13年連続増加しています。

文部科学省によると、児童生徒に対する指導法への自信喪失、保護者との人間関係の悩み、業務の多忙化・複雑化など複数の要因が絡んだケースが目立つとのことです。

一方、警察庁の発表によれば、平成19年中の自殺者数は33,093人で、過去10年間連続して３万人台が続いていることが分かりました。原因・動機が特定できたもののうち、一番多いのが「健康問題」で14,684人、なかでも「うつ病」が一番多く6,060人になっています。ちなみに同年の交通事故による死者数は5,744人で、実に６倍の数字です。不慮の事故で亡くなる人の数よりも自らの意思で命を絶つ人の数がこれほど多いということは異常な事態です。

価値観の多様化、競争社会の激化などにより、現代社会にはさまざまなストレスが存在します。ストレスをうまくコントロールできずうつ病など精神疾患を発症して、生活や仕事に支障をきたすこともあれば、ストレスを社会に対する不満に転換し、凶悪事件を引き起こす場合もあります。最近、いとも簡単に自らの命を絶ってしまう若者が多いような気がします。また、通り魔事件にみられるように、理不尽な動機による殺傷事件が増えていることも気がかりです。

公衆衛生の進展と医療技術の進歩により、日本は今や世界一の長寿国となりましたが、これほど人間の命が軽く感じられる時代は過去においてなかったはずです。まずは自分を大切すること、すなわち「自愛」が大事だと考えています。自分を大切にできるからこそ、他人の生命・身体も大切にできるのではないかと考えています。どうか、時節柄を問わず常日頃ご自愛ください。（平成21年３月号）

衣食足りて礼節を知る（管子）

故事成語として広く知られている言葉ですが、原文では「倉稟（そうりん）実ちて則ち礼節を知り、衣食足りて則ち栄辱（えいじょく）を知る」と書かれています。米蔵がいっぱいになると人は初めて礼儀道徳に関心を持って、わきまえるようになるし、衣食が十分に足りて生活が安定すれば、名誉とか恥辱というものをわきまえ重んずるようになる、という意味です。

昨年の秋以降、顕著となった未曾有の経済危機により、国内経済、地域経済は大きな打撃を受け、企業収益の悪化、雇用調整、消費不況と負の連鎖が続いています。政府は日本の経済成長率（実質成長率）を、対前年度比2008年度はマイナス3.1%、2009年度は同3.3%と予測しています。

振り返ってみると、私の幼少期・少年期に当たる昭和30年代から40年代（1955年～1973年）の日本社会は、まさに高度経済成長期にありました。当時の経済成長率は平均9.1%と現在の中国と同じくらいに経済が拡大していた時期で、日々暮らし向きが良くなっていくのを実感できた時代でした。「三種の神器」、「新・三種の神器」に象徴されるように、車・家電・家など生活関連の巨大な消費市場が形成された時代でもありました。現在と比較すれば隔世の感があります。

今日では、人的・物的資源や金融資源の配分、運用を効率化、最適化させるはずだった市場原理に基づく経済政策が失敗し、所得、雇用、医療・福祉、教育などの生活領域が大きな危機にさらされています。これらは、食品表示や産地の偽装事件などにみられる安全無視、育児放棄・児童虐待・高齢者虐待など家族内の信頼関係の喪失、学校や会社でのいじめ、毎年３万人を超える自殺者、誘拐・強盗など凶悪犯罪が増加している実態などから知ることができます。

このような状況だからこそ、雇用、医療、福祉などの生活領域におけるセーフティーネット（安全網）をしっかり構築することが必要です。礼節のある社会を維持するために、今まさに国民の衣食が足りる政策が求められているのではないでしょうか。
（平成21 年６月号）

為せば成る

「為せば成る　為さねば成らぬ何事も　成らぬは人の　為さぬなりけり」は、江戸時代屈指の名君として知られた米沢藩の第９代藩主上杉鷹山が、家督を継ぐ次期藩主に詠み与えた短歌です。この歌の意味は、何かを為し遂げようという意思を持って行動しなければ、何事も達成できない、良い結果が得られないということです。

鷹山が藩主に就任した当時の上杉家の藩財政はどん底にありました。借財が約120億円に膨れ上がる一方で、石高（ 領地） が15万石しかないのに家臣約５千人を召し抱えていたため、他藩に比べ人件費の割合が高く、累積債務と高い人件費が藩財政の大きな負担になっていました。加えて農村（地場産業）の疲弊や寺院普請（公共事業）への出費や洪水被害への対応（災害復旧事業）が重なり、藩財政は悪化するばかりでした。

藩主に就任した鷹山は、財政と産業振興に秀でた人材を重用し、藩財政の立て直しと藩政改革を断行しました。今でいう行財政改革です。自らはもちろんのこと、藩士・農民に質素勤倹（きんけん）を奨励し藩士には帰農を勧め、織物産業をはじめ製塩、製紙、製陶などの殖産興業にも努めました。一方で藩校の創設による人材養成や生活困窮者等の救済施策などに取り組み、破たん寸前の藩財政を立て直しました。「為せば成る」という歌には、困難にもめげず行財政改革を成し遂げた鷹山の不屈の精神が込められています。

今の阿賀野市の現状を見ると、当時の米沢藩とよく似ているような気がします。借金残高は439億円と大変大きな金額です。行政運営に必要な経常的経費の割合が高く、新規事業などで自由に使えるお金が少ないなど財政構造が硬直化しています。

阿賀野市が誕生して今年で７年目を迎えますが、合併後10年が経過した平成26年度からは、地方交付税（国から交付される使い道が自由なお金）が段階的に15億円ほど削減されます。私自身も上杉鷹山を手本に「為せば成る」の精神で行財政改革に取り組んでまいりたいと考えています。(平成22 年４月号)

人生の大病は傲（ごう）

「人生の大病はただこれ一の傲（ごう）の字なり」この言葉は中国明代の儒学者、思想家である王陽明が起こした陽明学の入門書「伝習録」に載っている一節です。「傲」とは、自分の能力や才能を鼻にかけて人を見下すことで、人生の最大の病気はこの「傲」の一字に尽きるという意味です。

元厚生労働省局長の無罪が確定した郵便料金不正事件の捜査過程で、大阪地検特捜部による捜査資料の改ざん・隠ぺい疑惑が発覚し、事件を担当した主任検事とその上司である特捜部長、副部長が逮捕されました。マスコミ報道によれば、主任検事による被疑者の人格を軽視した取調べや検察当局があらかじめ描いた事件の筋書きに沿った証拠作りが行われていたこと、上司である特捜部長らが主任検事による証拠改ざんがあったことを黙認していたことなどが伝えられています。この証拠改ざん事件は、組織ぐるみの隠ぺい疑惑に発展し、今や検察組織全体の信用・信頼を大きく損ねる事態となりました。

地検特捜部は、警察が捜査する一般的な刑事事件を扱う組織とは異なり、政治家汚職、大型脱税、経済事件を独自に捜査する捜査機関です。特捜部が扱う事件の多くは、政・財・官界に潜む悪事や不正を暴くというニュアンスでマスコミ報道されることが多く、「早く犯人を逮捕せよ」との国民世論が検察当局への大きな期待となって膨らんできます。一方で、検察当局は「正義」を錦の御旗に国民世論に応えるべきだとの思いが強くなり、担当する検事の方も功名心や出世欲も加わったりすると独善的な捜査になってしまう危険があります。その結果、捜査は「巨悪を明らかにして有罪に導く」という方針で行われ、被疑者に対する取り調べも有罪に導くための証拠（供述）を得ようと傲慢な態度で行われがちです。むしろ大事なことは事件の真相、真実を明らかにしたいという謙虚な態度ではないでしょうか。

今回の不祥事を強大な国家権力を握る検察組織のおごりや慢心が引き起こした事件として片付けるのではなく、権力を行使するすべての組織・個人に当てはまる教訓であると考えています。（平成22 年11月号）

よい競争、わるい競争

人は人生のさまざまな場面で競争を経験します。入学試験、就職試験、スポーツ競技、芸術文化のコンテストなど、挙げればきりがありません。個人だけではなく企業などの組織も競争社会の中で活動しています。競争のない人生や社会はありません。競争は人生に活力を与え、社会を発展させる原動力となります。

特に企業の経済活動は市場経済という競争社会の中で営まれています。消費者のニーズに合った新しい商品やサービスを開発し、既存の商品やサービスは質を改善し顧客満足度を向上させるなど日々、研さんを積み努力を重ねる中で行われる競争は「よい競争」です。今は敗者であっても次は勝者になることができます。一方、不正な手段や不公平な扱いで経済的利益が追求されているようであれば、それは「わるい競争」です。敗者と勝者が入れ替わることはありません。

経済のグローバル化に伴い、ヒト・モノ・カネが国境を越えて自由に移動できるようになりました。貿易はいわば国家間の経済競争です。現在、日本政府は環太平洋戦略的経済連携協定（ＴＰＰ）の参加に向けた検討を始めています。ＴＰＰは貿易自由化を目指す経済的な枠組みで、2015年までに参加国間の貿易において、工業品、農業品、金融サービスなどをはじめとした全品目の関税を原則として完全撤廃することを目指しています。

経済界では関税障壁がなくなることで、日本製の工業品が品質面での優位性に加え海外市場での価格競争力も高まるとして歓迎しています。一方、農業団体などは安い輸入農産物が国内市場に流入することにより、コメをはじめとする国内の農業が壊滅的な打撃を受けるとして反対しています。

日本の農業にとって、現状のままでのＴＰＰへの参加は不公平な条件で行われる「わるい競争」となります。日本の将来を考えた場合、ＴＰＰへの参加は避けられないものと考えますが、その前に国内農業の体質改善および体制強化に向けた改革をしっかりと行うことが先ではないでしょうか。(平成22 年12月号)

虎穴（こけつ）に入らずんば虎子（こじ）を得ず

中国の有名な故事で「何事も危険を冒さなければ、成功を収めることはできない」という意味で、リスク（損失）をとる覚悟がなければ、リターン（利益）は得られないということです。

例えば、手元に百万円の余裕資金があった場合、さまざまな運用方法があります。金融機関へ預貯金をすれば、元本は保証されますが利息はわずかです。株や投資信託などの金融商品を購入すれば、元本の保証はありませんが運用次第で大きな利益が得られます。損失は少ないが利益も少ない方を選ぶか、損失は大きいが利益も大きい方を選ぶかの二者択一の選択ではなく、分散投資などリスクマネージメント（リスク管理活動）をしっかりと行うことにより、小さな損失で大きな利益を求めることができます。

近年、地方の経済を支え雇用の受け皿となっている農業と建設業が人口減少と少子高齢化の影響で衰退しています。これは就業構造の経年変化に加え、米の消費減少による米価の下落、公共工事の受注減や景気低迷による民間投資の減少などの外部要因によるものです。また経営リスクを回避するため、時の政権が打ち出した農業政策や景気対策に身を委ねざるをえなかった特別な事情もあります。

このような現状を打開していくため、経営リスクはあるものの大きなリターンが期待できる農業や建設業の６次産業化の取り組みが始まっています。農業では、生産（１次産業）した農産物を加工（２次産業）して販売（３次産業）することにより、建設業では、高齢化の進展により需要の拡大が見込まれる介護施設などを建設（２次産業）し運営（３次産業）することにより大きな利益が期待できます。行政も同じですが、リスクをとる覚悟とリスクを管理する智恵をいかに引き出していくか、今試されています。
（平成23年３月号）

井の中の蛙（かわず）

この言葉は「井の中の蛙大海を知らず」でおなじみの故事成語ですが、「狭い世界に閉じこもって、広い世界のあることを知らない。狭い知識にとらわれて大局的な判断ができない。」という意味です。

四方を海に囲まれた島国に住む私たち日本人は、明治になるまでは「井の中の蛙」でした。四方が海という地理的条件に加え江戸幕府の鎖国政策によって諸外国との交易や交流が制限されていました。明治維新という開国によって、日本人は「井の中の蛙」から「大海」を知る海亀の存在を知りました。以後の日本は欧米列強を模範とし富国強兵と殖産興業による国力増強を目指しましたが、太平洋戦争の敗北を機に、平和外交と産業技術の確立による貿易立国へと転換し、今日までその礎を築いてきました。

昨年10月、根岸英一さんと鈴木章さんの二人の日本人がノーベル化学賞を受賞しました。根岸さんは受賞インタビューの中で、資源を持たない日本が産業分野での国際競争に勝ち残るには、基礎になる科学技術力を磨くことしかなく、そのためには若いうちから海外の研究機関に出向いて、他国の研究者と切磋琢磨することが大切であると強調されていました。根岸さん自身も若い頃にアメリカのパデュー大学に在籍し、この時期の研究成果がもとになりノーベル賞の受賞につながりました。

確かにこれまで日本が世界に誇る産業技術を確立し国際競争で優位性を確保できたのも、根岸さんや鈴木さんのようなノーベル賞受賞者をはじめ優れた研究者、技術者の努力・功績によるところが大きい一方で、根岸さんも心配するように、近年、海外の大学、研究機関に在籍する日本人学生や日本の若手研究者が減ってきていることが気がかりです。

巨大地震と大津波の自然災害によって引き起こされた原発事故としては、世界で初めてとなる福島第一原子力発電所事故の収束に向けた日本の取り組みに世界が注目しています。「大海」を知る日本の産業技術の真価が、今問われています。
（平成23年６月号）

青は藍より出でて藍より青し（荀子）

藍とは染料に使う藍草のことで、藍草で染めた布は藍草よりも鮮やかな青色となることから、この関係を弟子と師匠にあてはめ、弟子が師匠の学識や技術を超えるという意味のことわざとして知られています。この「出藍の誉」は、スポーツや芸術・文化などの師弟関係においてだけでなく、経営者とその後継者との関係においても、周囲から寄せられる期待として表れてきます。

「阿賀野市産業経済振興基本計画」の策定に向けた基礎資料とするため、昨年３月に一般住民、農家、事業所を対象にアンケート調査を実施しました。経営上の問題について農家に尋ねたところ、「後継者不足、高齢化、労働力不足」と回答した方が最も多く、最大の経営課題になっていることが分かりました。

実はこれを裏付ける調査結果が平成22年農林業センサスにありました。市の農業就業人口の平均年齢は67.8歳で、５年前と比較して５歳も上昇しました。後継者がいないため経営者の高齢化が進んでいる実態が分かりました。この「後継者がいない」というのは誤った認識で、正しくは「後継者を育ててこなかった」ことが問題であったと考えています。

私も農家の子（長男）として生まれましたが、物心が付く頃になると、親からは勤め人になるようにと繰り返し言われました。その頃の父は近くの上場企業の製造工場で働いていました。当時の日本経済は高度経済成長期にあって、会社に勤めていれば毎月決まった給料が現金収入として入り、年に１回しか入らない農業収入と総額で比較しても数倍の開きがありました。親が私に勤め人になるよう勧めたのも、当時の経済情勢や家計の事情からすれば無理からぬことだと理解しています。

「出藍の誉れ」となる後継者を育てるには、経営者が自分の職業に誇りと自信を持ち、後継者にその魅力と将来の可能性をしっかりと伝えることが大切です。特に農業に関しては、行政としての早急な支援も必要であると考えています。
（平成24年２月号）

和して同ぜず（論語）

原文では、「君子（くんし）は和して同ぜず、小人（しょうじん）は同じて和せず」とあり、「君子（賢者）は協調性に富むが、無原則な妥協は排斥する。一方、小人（愚者）はやたらと妥協するけれども、真の協調性には欠けている」という意味です。ここでいう「和」とは自己の主体性を持ちながら他と協調することで、「同」とは自分の主義主張を持たず、他の言動につられて行動することです。君子は、自分の信念（考え）をしっかりと持った上で、他者の考え方などを尊重して、譲り合うことのできる人物ですが、小人は信念もなく他人に迎合するだけの人物ということになります。

文化や宗教などの精神風土や地理的、歴史的な諸条件が異なる国際関係においては、「和して同ぜず」の精神が特に重要となってきます。2005年２月、当時の駐日中国大使であった王毅氏が日本学士会において、日中関係について「和して同ぜず」を引用して、「〝和〟を追い求めると同時に、われわれは〝和して同ぜず〟をも提唱しています。〝同ぜず〟とは〝和〟を保ちますと同時に、自分の特色をも生かします。（中略）調和を強調しながら千篇一律にしない、お互いに違いを尊重しながら衝突を起こさない、調和を持ってともに成長し、違いを持って互いに補い合うということであります。言い換えれば、平等と包容の精神に基づき、違う文明が仲良く共存し、共同発展と共同繁栄を求めることであります」と述べています。国際社会だけでなく、価値観が多様化している現代社会においても、仕事や生活の中で自分と異なった意見や考え方に直面することが多くなっています。

異なる意見や考え方を一方的に排除したり、また無原則に妥協するのではなく、調和のある関係に発展させ、お互いが成長できるように努力することが大事だと考えます。互いの意見を衝突させ互いに譲らない状況（和せず同ぜず）になっては、お互いの利益にはなりません。市政運営において、大いに参考としたい一言です。
（平成21年９月号）

君子（くんし）の交わりは淡きこと水のごとし（荘子）

原文では「君子（くんし）の交わりは淡きこと水のごとく、小人（しょうじん）の交わりは甘きこと醴（れい）の若し」とあり、職場での付き合い方や日常での交友関係について述べています。「物事をよくわきまえた人の交際は、水のようにさらっとした淡白な関係ではあるが長続きする。一方、つまらない小人物の交際は、甘酒のように甘くべたべたした関係であり、一時的には濃密な関係を保っているように見えても、長続きせず破たんを招きやすいものだ」という意味です。

私自身のこれまでの人生を振り返ってみると、この言葉の意味がよく理解できます。学生時代の同級生、県職員時代の同期・同僚、長期研修での同窓生、山岳クラブなど趣味の会で知り合った人たちとの交友関係は今でも続いています。これらの人たちとの付き合いでは、お互いの思想信条やプライバシーには深く立ち入らない、干渉したりしないことが暗黙のルールとなっています。たまに会って酒を酌み交わしながら近況を報告し、情報や意見を交換する程度の関係ですが、まさに「朋あり遠方より来る、また楽しからずや」（論語）の心境です。

一方、短い付き合いで終わった人たちとの関係を振り返ってみますと、それは損得勘定などの利害や一時的な感情の高まりで始まった関係です。最初は濃厚な交際で始まりますが、やがては利害が相反することになったり感情が急に冷めてしまったりと、張り詰めた糸が切れるように、つながりが途絶えてしまいました。

恋愛関係や夫婦関係など男女の関係においても同じことです。最近、ドメスティック・バイオレンスが増えているそうですが、これは濃密な関係を強要するあまり暴力に発展し、良好な関係が破たんしてしまうケースです。

人生を賢く生きる知恵の一つとして、これからも「君子の交わり」を励行し、良好な人間関係を築き持続させたいと考えています。（平成21年10月号）

情けは人の為ならず

この言葉は「情けは人のためではなく、いずれは巡って自分に返ってくるのであるから、誰にでも親切にしておいた方が良い」という意味です。

東北・関東地方の太平洋沿岸域に未曾有の被害と損害をもたらした東日本大震災が発生して１月半が経過しました。災害対応も救助・救援の段階から復旧・復興の段階へと移ってきました。この間、多くの救援物資や義援金の提供をはじめ避難所等でのボランティア活動やチャリティー活動など物心両面での心温まる支援の輪が日本全国、世界中に広がっています。

一方、福島第一原子力発電所の事故を受け、福島県内から多くの被災者が新潟県内に避難しています。当市においても、市内に設置した２か所の避難所に地震発生当初は400人ほどの方が避難されていました。これまで市民の皆さまからお寄せいただいた心温まるご厚志に感謝を申し上げます。

地震発生後、大津波が被災地を襲い多くの家屋や車などを押し流している映像がテレビ放送やインターネットを通して全国、世界中に配信されました。あの流されている家屋や車の中に人がいたと思うと胸が痛み、とても冷静な状況ではいられませんでした。

自然災害は、私たちの身近な場所でいつでも、どこでも発生する可能性があります。「情けは人の為ならず」は、「自分の為になるから日頃から他人に善意を施しておけばよい」という見返りを期待して施す善意ではありません。「決して他人ごとではない」、「自分も同じように他人から情けを受けるかもしれない」という共感から自然に生まれてくる感情だと理解しています。

市としては、「情けは人の為ならず」、「困った時にはお互いさま」の互助・共助の精神で、今後とも被災地・被災者・避難者に対し、できる限りの支援を行ってまいりたいと考えています。市民の皆さまのご理解とご協力をお願いします。（平成23年５月号）

利己（りこ）と利他（りた）

「利己」は、自分の利益だけを考え他人のことは顧みないことです。また、「利他」は、他人に利益となるように図ること、自分のことよりも他人の幸福を願うことです。

最近、若者の間でボランティア活動など、社会貢献を目的とした活動が盛んになっています。３・11東日本大震災など大きな災害の被災地では、避難所の運営やがれきの撤去など、災害ボランティア活動に従事する若い人の姿を目にするようになりました。また、被災地に行かなくても、インターネットや携帯電話の交流サイトなどを通して被災者の安否情報の提供や物資提供など、今どきの若者が得意とするＩＣＴ（情報通信技術）を活用した社会貢献も見られるようになりました。

さらには、昨年12月に群馬県前橋市の児童養護施設に、伊達直人を名乗る人物からランドセルが贈られた出来事を皮切りに、全国に「タイガーマスク現象」が広がりました。これらの社会貢献活動や匿名の寄付行為は金銭的報酬や名誉になるものではありません。自分にとって利益のない行動を取るのはなぜでしょうか。先日ある新聞を読んでいたら、解答が見つかりました。

他人の利益になる行為をすることが、金銭的な報酬と同じものと脳の中では認識されるというものです。利他行為をすると脳の中の「報酬系」と呼ばれる神経回路が働き脳内物質のドーパミンが分泌され、人は心地よさや快楽を感じるそうです。善意を施した相手からもらう笑顔や感謝の言葉に思わず「うれしい」と感じるのは、この脳内物質の分泌が関わっていたのです。利益を経済的報酬のみでとらえた場合「利他」と「利己」とは相反する関係に見えますが、精神的報酬も含んだ概念と理解すれば両立できる関係にあると思います。

「阿賀野市まちづくり基本条例」が今月から施行されます。これからのまちづくりを考えた場合、「利他」と「利己」を両立させる関係に持っていくことが大切と考えます。「利他」の縦糸と「利己」の横糸で織り上げた布に、市民の皆さまと協働して幸福社のまちづくりを描いてまいりたいと考えています。(平成23年10月号)

新たな責任の時代（a New Era of Responsibility）

2009年１月20日、バラク・フセイン・オバマ氏が第44代アメリカ合衆国大統領に就任しました。この言葉はオバマ氏の就任演説の中で語られ、感銘深いフレーズとして私の記憶に残っています。

演説ではアメリカの艱難辛苦（かんなんしんく）の歴史を「旅」にたとえ、多くの名もなき働く男女が長く険しい道をたどり、米国を繁栄と自由に向かって導いてくれたことをたたえています。また成功を左右する価値観として、誠実さや勤労、勇気や公正さ、寛容や好奇心、忠誠心や愛国心を挙げて、これらの価値観は昔から変わらない真実であると語っています。

安全保障や経済危機、地球環境に対する脅威に直面している現在、米国市民に求められていることは新たな責任の時代であり、それは自分たち自身や国家、世界に対し義務を負っていることを認識し、喜んで義務を受け入れ、困難な任務に立ち向かうことだとして、このことが米国市民であることの代償であり約束だと述べています。

第35代ケネディ大統領の就任演説の中にも同じような表現があります。「アメリカ国民の皆さん、祖国があなたのために何をしてくれるのかを問うのはやめましょう。あなたが祖国のために何をできるかを問うのです」というフレーズです。ケネディ大統領が就任した1961年は東西の冷戦構造が鮮明になり、米ソの核兵器開発と宇宙開発競争による軍備拡張路線が続いていました。またキューバ危機（1962年）にみられるように全面核戦争の危機が現実化した時代です。

未曽有の経済危機が世界中に広まり、日本国内にも地方にも大きな不況の波が押し寄せています。やり場のない閉塞感が漂う中、自己の責任や義務を放棄、回避する一方で、他人のせいにしたり、他人まかせにしたりと無責任な言動が目立つような気がします。これでは何の問題解決にもなりません。危機に局面している今こそ、個人も組織も政府も自らの立場や役割に応じた義務や責任を認識し、一致団結して難局に立ち向かっていくことが大事であると考えます。(平成21年５月号)

シンクグローバリー、アクトローカリー

(Think Globally Act Locally)

この言葉は「地球規模で考え、地域で行動する」という意味で、地球環境問題に取り組む際のキーワードとなっています。なかでも地球温暖化への対応が国際社会における大きな課題として認識されています。地球温暖化に対する国際的な枠組みとして気候変動枠組み条約があり、この条約の締約国会議において温暖化ガスの排出削減量などの取り決めが行われ、今年の12月にコペンハーゲンで第15回締約国会議（ＣＯＰ15）が開催されます。

先ごろ、麻生総理から日本の温暖化ガス排出削減の中期目標が発表されました。2020年時点の国内における温暖化ガスの排出削減量について、2005年比15％削減（1990年比8％減）とするものです。この中期目標を達成するための対策として太陽光発電、エコカー、省エネ住宅などの普及開発に向けた政策（グリンニューディール）が打ち出されています。

市内では県営東部産業団地の今後の展開方向として太陽光発電やバイオマス構想が検討されています。一方、笹神地区を中心に資源循環型の米づくりが行われています。もみ殻や畜産農家から出る牛の糞尿、転作大豆で作る豆腐から出るおからなど、地域から排出される有機廃棄物を原料にした堆肥づくりが行われています。

我が家では、鶏を十数羽飼い資源循環型の野菜作りをしています。鶏糞は畑の肥料として使い、家庭で出た残飯などの食品残渣（ざんさ）は鶏の餌にしています。私個人では、紙ごみをなるべく出さないよう古紙として分別し、お昼の弁当にはマイ箸を使っています。また買い物をする時にはエコバックを使うようにしています。

環境問題は地球規模で考える必要がありますが、対策には政府・企業だけでなく地域や家庭、個人の取り組み（行動）も必要です。「明日のエコ」では間に合いません。今日からでも始めてみませんか。できることから始めて、そして続けることが大事です。
日々の小さな活動であっても、それが続いて広がれば、やがて大きな成果となって現れてくると考えています。(平成21年７月号)

虫の目、鳥の目、魚の目

物事を考えるときには、３つの目を持つべきだとされています。現場を見る「虫の目」、大局を見る「鳥の目」、流れを読む「魚の目」です。「虫の目」は、細部まできちんと見極める能力で、「鳥の目」は全体像をしっかり見渡す能力です。また、「魚の目」は時間の流れの中で現在と未来を見通す能力です。いずれも大切な能力ですが、仕事や生活に大きな変化が求められているときには、「鳥の目」や「魚の目」が特に重要ではないかと考えています。

精神的、時間的に余裕のない暮らしに追われていると、とかく「虫の目」だけで物事を考えてしまいがちです。今、目の前に起きている事象だけに目を奪われ、周囲のことやこれからのことに考えが及ばないことが多いのではないでしょうか。

先日、立山連峰の剱岳を舞台にした映画「剱岳　点の記」を観ました。今から一世紀ほど前の明治40年、陸軍陸地測量部の柴崎芳太郎と案内人の宇治長次郎、日本山岳会を率いる登山家小島烏水らが、それぞれの使命、目的をもって過酷な自然に立ち向かい、ただ一点、未踏の剱岳山頂を目指します。

柴崎は軍の上層部から「陸軍の威信にかけて、剱岳の初登頂と測量を果たせ」という命令を受け、地図作りの任務は無事果たしましたが、初登頂は果たせませんでした。実は、柴崎が山頂で発見した銅錫杖頭（とうしゃくじょうとう）から、既に修験者が初登頂を果たしていたのです。

柴崎は「なぜ地図を作るのか」という問いに対し、それは軍のためではなく、そこに生活する人々のためだと悟ります。柴崎の「なにをしたかではなく、なんのためにそれを成し遂げたかが大事だ」という言葉には、剱岳測量という業績が軍の威信という小さな、しかも目先の目的達成にとどまらず、人々の生活向上という大きな目的のため、また将来の利活用を見据えた、「鳥の目」、「魚の目」の考え方が含まれていると理解しています。私にとっては、記憶に残しておきたい言葉の一つです。（平成21年８月号）

独立宣言

私事で恐縮ですが、この春、子ども（娘）が生まれ父親になりました。「子を持って知る親の恩」と申しますが、子を持って初めて、親の愛情の深さと子育ての責任の重さを認識することができました。

娘が生まれたのは4月11日の夕刻でした。ちょうど東日本大震災の大きな余震があった頃で、阿賀野市においても震度５弱の大きな揺れがありました。幸いなことに揺れが大きかったにもかかわらず、被害が無くて安堵しました。

私はその頃、妻の出産に立ち会っていました。我が子の誕生を廊下で待つことにしていましたが、看護師さんの勧めもあって断り切れず、恐る恐る分娩室に入りました。我が子の誕生の瞬間に立ち会える喜びもありますが、それ以上に分娩台に乗った妻を見て、母子の無事を祈らずにはいられませんでした。私にできることは、妻に励ましの声を掛けることくらいでした。

時間もどの位経過したでしょうか。妻が渾身の力を振り絞って我が子を体外に押し出そうとしたその時に、妻の血圧が急上昇し数値が170を越えて警告音が鳴り響いて止みませんでした。この時ばかりは、私の不安も最高レベルに達し、神仏の御加護（ごかご）にすがりたい気持ちでいっぱいでした。ほどなく、へその緒につながった赤子が現れ、へその緒が切られるや「おぎゃー」と大きな産声が部屋中に響き渡り、まさに娘の独立宣言でした。

娘の独立宣言によって法的な人格と人権が付与されました。名前が付けられ戸籍に搭載されることにより、権利（自由）と義務（責任）も発生しました。今は栄養をもらっていた母体から離れたという意味での「独立」であり、これからは、自力で社会生活ができるという意味での「独立」に向け、息の長い教育（子育て）が始まります。我が子の精神的・経済的な自立に向けて、親としての責任を果たしていきたいと考えています。（平成23年９月号）

見るべし、聞くべし、言うべし

日光東照宮にある有名な彫刻の一つに「三猿」があります。三匹の猿が両手でそれぞれ目、耳、口を隠している姿の彫刻で、「見ざる、聞かざる、言わざる」という叡智（えいち）の三つの秘密を示しているとされています。

「三猿」は、神社の神厩（しんきゅう、馬小屋のこと）に彫られている８構図の猿の彫刻の一つで、子育てから恋愛、結婚、妊娠と人間の一生を風刺するように彫り込まれています。三猿は幼年期にある猿、すなわち人間でいえば子どもにあたり「悪い事を見たり、言ったり、聞いたりしないで、素直なままに育ちなさい」という子育ての方針が示されています。

ところが、大人になっても三猿のままの人がいます。「真実に目をそむける、うわさ話を信じる、本当のことを言わない」大人です。私は、大人になったらむしろ「見るべし、聞くべし、言うべし」と考えています。善悪を含む世の中の事物・事象を自分の目で見て、自分の耳で聞いた上で自分の考えとしてまとめ、それを自分の意見として相手に伝えることは、大人の世界では当たり前なことだと思います。

しかしながら、自分で全てを見聞きすることは現実的には不可能で、マスメディアなどが提供する情報に頼らざるを得ません。ここで気をつけなければならないことは、マスメディアが伝える情報は事実や真実の一部分・一面でしかないという点です。マスメディアが伝える一編の記事を鵜呑のみにして判断することは大変危険な場合があります。特に、その分野の権威者と言われる人の意見が掲載されると、自分の意見として他人に伝えてしまう、いわゆる請け売りが多くあるからです。これを防ぐには、いろいろな人の意見を聞くこと、常識という物差しで疑ってみることも大事だと思います。

先月、野田総理はＴＰＰ（環太平洋戦略的経済連携協定）への交渉参加を表明しました。交渉参加を決めたからには、交渉の中で参加国の国内事情や考え方をしっかりと見聞きしたうえで、日本の国益を踏まえた意見や考え方を正々堂々と主張すべきではないでしょうか。（平成23年12月号）